15 桑田忠親『太閤記の研究』（徳間書店、一九六五年）
16 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）
17 柳沢昌紀「小瀬甫庵にとっての歴史―『年代紀略』と『信長記』『太閤記』―」（『日本文学』五九巻一〇号、日本文学協会、二〇一〇年）
18 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）
19 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
20 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
21 桑田忠親『太閤記の研究』（徳間書店、一九六五年）
22 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
23 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
24 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）

『川角太閤記』の成立年については今後の課題となるであろう。現代での秀吉像はこの『川角太閤記』から始まっているといっても過言ではない。江戸時代初期に記されたと考えられてきたにも関わらず他の伝記の参考とならなかったのか。まだ秀吉の伝記物は研究の余地があるようだ。

参考文献

堀新・井上泰至『秀吉の虚像と実像』（笠間書院、二〇一六年）
名古屋市博物館『豊臣秀吉文書集　一　永禄八年～天正十一年』（吉川弘文館、二〇一五年）
金子拓「清洲会議とはなにか」『歴史読本』第五十八巻第十二号（kadokawa、二〇一三年）
柳沢昌紀「小瀬甫庵にとっての歴史―『年代紀略』と『信長記』『太閤記』―」（『日本文学』五九巻一〇号、日本文学協会、二〇一〇年）
藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）
尾下成敏「清須会議後の政治過程―豊臣政権の始期をめぐって―」（『愛知県史研究』十号、愛知県、二〇〇六年）
吉川英治『新書太閤記（四）』吉川英治全集二十二（講談社、一九八〇年）
竹中重角『豊鑑』（『群書類従 新校』第十六巻、内外書籍、一九二八年）
檜谷照彦『太閤記』（『新日本古典文学大系』六〇、岩波書店、一九九六年）
桑田忠親『豊臣秀吉研究』（角川書店、一九七五年）
桑田忠親『太閤史料集　天正記』（人物往来社、一九六五年）
桑田忠親『太閤記の研究』（徳間書店、一九六五年）
矢田插雲『太閤記』巻十二（宝文館、一九三三年）
早稲田大学編輯部 編『通俗日本全史 第八巻　太閤記上（法橋玉山）』（早稲田大学出版部、一九一三年）
川角三郎右衛門『川角太閤記』第二（『改定史籍集覧』第十九冊目、近藤出版部、一九二一年）
栗原柳庵『真書太閤記』三之巻（博文館、一八九八年）
小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
林羅山『豊臣秀吉譜』（国文学研究資料館館蔵和古書目録データベース所蔵）

注釈

1 桑田忠親『豊臣秀吉研究』（角川書店、一九七五年）
2 堀新「秀吉の生まれと容貌　実像編」（『秀吉の虚像と実像』、笠間書院、二〇一六年）
3 湯浅恵子「秀吉の生まれと容貌　虚像編」（『秀吉の虚像と実像』、笠間書院、二〇一六年）
4 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）
5 檜谷昭彦　江本裕『太閤記　新日本古典文学大系』六〇（岩波書店、一九九六年）
6 金子拓「清洲会議とはなにか」（『歴史読本』第五十八巻第十二号、二〇一三年）
7 名古屋市博物館『豊臣秀吉文書集　一　永禄八年～天正十一年』（吉川弘文館、二〇一五年）
8 谷口央「清須会議と天下簒奪　実像編」（『秀吉の虚像と実像』、笠間書院、二〇一六年）
9 谷口央「清須会議と天下簒奪　実像編」（『秀吉の虚像と実像』、笠間書院、二〇一六年）
10 金子拓「清洲会議とはなにか」（『歴史読本』第五十八巻第十二号、二〇一三年）
11 尾下成敏「清須会議後の政治過程―豊臣政権の始期をめぐって―」（『愛知県史研究』十号、愛知県、二〇〇六年）
12 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）
13 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』（講談社現代新書、二〇〇七年）
14 小和田哲男『豊臣秀吉』（中公新書、一九五五年）

高めることや江戸幕府を開いた徳川家康について庶民にイメージをつけることを恐れて太閤記物が禁止された。

この頃の秀吉は庶民の英雄として人気を集めていた。江戸時代は兵農分離が固定されてしまっていたため、戦国時代の秀吉のように庶民から天下人となるような能力による出世というのは不可能な時代であった[23]。『甫庵太閤記』等の書物や浄瑠璃や歌舞伎などの普及により庶民に秀吉の出世譚が広まっていたが、庶民にとって秀吉は憧れであり英雄であった。故に、『真書太閤記』や『絵本太閤記』の清州会議の記述で、勝家の秀吉を殺す策略を描くのは勝家の悪役性を高めることによって、秀吉の英雄性を高めたのではないかと考える。

明治時代には『真書太閤記』や『絵本太閤記』が分かりやすく簡潔に記された豆本が流行している。また、江戸時代には弾圧されていた豊国社であったが、明治天皇は新時代到来のアピールのため豊国社再興の沙汰書を下しており、明治十三年（一八八〇）に再興している。当時アジア侵略など戦争を行うようになったという時代背景があったため、信長に代わって天下統一を遂げたばかりか、朝鮮侵略を行った秀吉を軍神として人気を集めることとなった[24]。また、能力による出世ができるようになったことにより秀吉は理想像として庶民から人気を集めていった。

大正時代には『真書太閤記』や『絵本太閤記』を元に描かれた『太閤記物語』が出版されるが、昭和に入ると、『川角太閤記』を元に描かれた『太閤記』と『新書太閤記』が記される。この頃からは勝家と佐久間が共謀し秀吉を討たんとする記述が清洲会議の中ではあらわれなくなる。歴史小説であるため、史実に沿いながらも脚色し物語として描かれている。

特に『新書太閤記』は映像化によって大衆に流行した。昭和二十八年（一九五三）に「新書太閤記 流転日吉丸」「新書太閤記 急襲桶狭間」、昭和三十三年（一九五八）に「太閤記」が映画で上映された。一九五九年には毎日放送にてテレビドラマが放映され、一九六五年にはＮＨＫ大河ドラマが放映されており、これは高視聴率を獲得している。このように映像で秀吉の情報が得られる時代となり、大衆に娯楽として秀吉像が広まっていった。『新書太閤記』の映像化の後にも、「黄金の日々」、「おんな太閤記」等と太閤記物はヒットしていった。

近年話題になった太閤記物としては清洲会議をピックアップした『清須会議』（作・三谷幸喜）という小説があり、二〇一三年に映画化されている。信雄と信孝がどちらが優れているか勝負をして跡継ぎを決めようとするが、三法師の存在に気付いた秀吉が大老たちを言い負かし三法師が跡継ぎとなる、という内容である。勝負をするという時点でかなりの脚色があるが、流れは『川角太閤記』になぞった内容であり、『新書太閤記』でも同様であることから、現代での清洲会議の通俗は『川角太閤記』が大元になっていると考えられる。

終章　おわりに

本論文では清洲会議を題材に伝記物を時代ごとに読み取り、描かれ方の違いを探り秀吉像の変遷を考察した。清洲会議の伝記の記述は、会議の結論については史実通りであるものが多かった。しかし、会議の詳細は脚色して描かれているものばかりであった。会議の詳細の記述は『川角太閤記』に始まり、秀吉が上手く三法師に家督を継がせようと促すという秀吉像が創造され、途中『絵本太閤記』や『真書太閤記』によって勝家の悪役性が加わり秀吉を殺そうと企てており、それを上手く避け勝家を制するという秀吉像に変化した。現代には『川角太閤記』での秀吉像が他の伝記物も参考にしながら描かれた、言葉巧みに勝家を制し余裕がある秀吉像へと変化している。

清洲会議がドラマチックに描かれ始めたのは江戸後期からである。この時代の伝記は秀吉の勝家の怒号にも屈しず、柔軟な対応をする姿が後世に語り継がれる。そのような内容の会議がなされたという史実は無いが、秀吉像創造のきっかけになっていったのではないかと考える。秀吉像は伝記物により創造され、時代の流れと共にその像が変化していったことを本論文で考察できた。清州会議の史実については史料が極めて少なかった。史実の研究はこれ以上深堀りできないのではないかと考える。

蜂屋頼隆など居流れていた。もちろん、一門の神戸三七信孝と、北畠信雄の二人が、席をわかっていたが、なお一方の上襖へ寄って、もうひとりの幼い君が、傅人の長谷川丹波守に抱かれていた」とあるように、滝川も含む主要の大老と信孝、信雄の同席、三法師までもが同席していた。

「薫香散（くんこうさん）」には会議の内容が記されている。勝家が主体となり会議が進む。会議の題目として第一に織田家の世継ぎ、第二に領地配分であった。秀吉が虫気を装い広間を出て横になる様子やいなくなった間長秀が勝家を説得する様子は、『川角太閤記』のままに描かれている。領地配分に関しては、他にない記述であった。勝家の領地割の原案に、筆で秀吉が手を加えている。秀吉が望むのは丹波の国一国のみであった。この件は一時保留となり会議一日目はここで終了する。

会議二日目には、勝家が妥協案を考え提示。その妥協案は秀吉を除いた武将で談合したが、ほとんどが秀吉に加担していたためほとんど秀吉の意のままの案になっていたという。山崎で功績を残しているのにも関わらず、秀吉は自分の領地であった長濱、安土坂本も譲る行為は「（自分には、天下をうかがう意などない）それを秀吉は敢えて衆に示すべく、わざと取らなかったものか。（中略）なお未だ、彼の大腹中を真に知るものはなかった」と秀吉の策略によるものではないかと悟す描き方である。

「虎口」の章には結果が記されている。織田家家督は三法師で、傅人役は長谷川丹波守、前田玄以、加えて秀吉に決定。信雄、信孝は後見人となり、京都に柴田、羽柴、丹羽、池田の四家の家中から役人を出し、庶政を合議裁決することが決定となった。

吉川英治の『新書太閤記』は、その後ＮＨＫ大河ドラマなどで映像化がなされた。現代における秀吉イメージに大きな影響を与えた作品といえる。

以上、伝記物の清洲会議の記述の詳細を見当した。伝記物における秀吉像の特徴や関連、秀吉像の変遷を第二節にて検討する。

第二節　移り変わる秀吉の虚像

第一節で各時代に秀吉のことを記した伝記の詳細をみた。秀吉の伝記は記録から読本、実録本、歴史小説と形を変えている。『天正記』は戦国時代、『甫庵太閤記』『豊鑑』『豊臣秀吉譜』は江戸時代初期に記されているもので、歴史の記録として多少脚色があるものもあるが、史実通りである。清洲で会議が行われたこと、三法師が織田家家督を継ぐことは忠実に描かれていた。しかし会議の結果と詳細が簡潔に描かれていただけで会議の流れや、出席者の発言など全貌が見えてくる記述ではなかった。

また、『甫庵太閤記』が『太閤記』の基盤となったと通俗で言われていることを記した。『甫庵太閤記』は今までの伝記よりまとまった伝記であったために、寛永三年に開版されたあと、正保三年（一六四六）、万治四年（一六六一）、宝永七年（一七一〇）、正徳年間（一七一一～一七一六）、寛政三年（一七九一）というように版を重ね、ひろく庶民にまで愛読されていき、これが『絵本太閤記』や『真書太閤記』に反映されていったと小和田哲夫氏はいう[20]。

一方、その中で異彩を放っていたのは『川角太閤記』である。『川角太閤記』は文学じみた描き方であった。この文学のような描き方は江戸後期の作品からしか見られない。通説では作為や潤飾のない素朴な古記録[21]であるというが、清洲会議の場面における文学的な記述のされ方は潤飾がされているといえる。江戸時代初期に記された伝記であるのに、後に同様な描き方をされていたのは大正時代に記された矢田插雲の『太閤記』からの作品である。それまでに出てきた太閤記物の中に引用されなかったのは、成立年がこれまでの通説とは異なる可能性も考えられる。

江戸時代後期に記された『絵本太閤記』は読本として、『真書太閤記』は実録本として流布した。どちらも読みやすく記され、『絵本太閤記』は挿絵があることによりイメージが付きやすい。大衆向けに記された伝記であり庶民から人気を集めた。それを裏付ける理由として挙げたいのが、太閤記物の発禁処分である。幕府が法律をもって明確に「家康および徳川氏のことを描いてはならない」という禁止規定を設けたのは八代将軍吉宗の時代、すなわち、享保の改革からである[22]。秀吉の人気を

蓋し、此時信雄、信孝の両將各々自ら嗣たらむとのこころあり、信雄は第二子なれば當然の順序也。信孝、第三子と雖も山崎の軍に働きあり、互に我こその色表に露はに、諸將、又、皆各々両將の何れかに心を寄す。而して、勝家は信孝を擁せむとするの意ある也。秀吉、早くも勝家の意を察知す。（二五二頁）

秀吉がただ一人三法師の案を考えているような記述である。また、勝家の考えも先読みして三法師を推しているのだ。勝家にまだ三法師は幼すぎるので成長するまで信孝と信雄を後見人として仕えるのはどうかと指摘されるが、どちらも養子に入った別の家の者なのでふさわしくないと正論をぶつけられ反論するものは誰もいなかった。特に後見人が誰になったかは記述されていなかった。

酒の席の件や領地配分の評議に関しても、『真書太閤記』と同様であった。

⑨矢田插雲『太閤記』

矢田の『太閤記』は、大正十四年（一九二六）十月十四日から報知新聞夕刊に連載されていた歴史小説である。引用は矢田插雲『太閤記』巻十二（宝文館、一九三三年）を参照する。

清洲会議は「諸将清洲に参会」「信孝か三法師か」「丹羽長秀の緩和説」「勝家自説を抛つ」「三法師丸懐柔」の五つの章立てで記載してある。

会議は清洲で行われる。理由として『絵本太閤記』と同じように前田玄以が信忠の「岐阜なる妻子を清洲に伴い、長谷川丹後守とを併せて末永く守り立てよ」という命にて三法師達を清洲に移動させており、清洲に三法師が居ることから秀吉等の武将が清洲に参会している。

会議の様子は『川角太閤記』になぞらえて描かれている。まず、秀吉と勝家の立場を会議前に両人の考えが描写されている。「勝家は何時しか信孝と人目を忍ぶ仲になつてゐる、という噂があった。勝家が信孝を擁立せんとするのは公私ともに當然であった」という勝家の立場と、「羽柴秀吉はこれまた、何時の間にか信雄と人目を忍ぶ仲になつてゐた、との噂がある。併しいくら私情上、信雄をひいきしても、父親の弔合戦に尻込みするほど臆病ものゝ信雄を、信長の跡目にと主張する勇気は秀吉にない。（中略）秀吉は、純嫡流説に據りて、信忠の遺児の三法師丸を跡目に据えるのが、一番穏當であると信じた」という秀吉の考えがはっきりとしている。また、秀吉が三法師の所に通い他の武将達となじまない間に三法師を手名付けていたことで早々に秀吉の頭の中では三法師が信長の跡目になることを考えていたことが窺える。

その後秀吉が虫気を装い広間から出ていき勝家が長秀に言いくるめられ三法師を跡目にすることに賛成するという様子は『川角太閤記』そのままである。

⑩吉川英治『新書太閤記』

吉川英治の『新書太閤記』は昭和十四年（一九三九）一月一日から昭和二十年（一九四五）八月二十三日まで連載された歴史小説である。引用は吉川英治『新書太閤記（四）』吉川英治全集二十二（講談社、一九八〇年）を参照する。「柴田勝家」「折り鶴」「薫香散」「虎口」の四章にて描かれている。

「柴田勝家」の章には事細かに勝家の事が記されている。終盤部分にて、勝家が諸将に書状を送っている。内容は「七月一日を期し、清洲に会合、主家の継嗣のこと、明智の旧領処分の問題など、当面の重大懸案を議せん」というもので、武将たちが清洲に赴く理由となる。また、勝家の書状が届く前に清洲に向かっている人もいるという。その理由は「信長の嫡子信忠の遺子三法師丸がいる関係上」とある。勝家が出した書状と三法師が清洲に避難しているという二つの理由が重なったため、清洲で会議が行われた由来となっている。

「折り鶴」の章には会議の序盤が記されている。会議の日程は七月二日。「明日、辰之下刻、総登城候へ、御城ニ於テ、各々申シ談ジ、天下人ヲ相定ムベク候也」と勝家が七月一日の夕方に触状を出していた。歴史小説が故に、日時を定めて読者に想像しやすくする為であろう。

勝家が評議にて信孝を推すことは公然に知られていた。信孝と勝家は結託していた。会議の参加者は「柴田、羽柴、丹羽、滝川、左右両座にわかれて向いあい、以下、池田勝入、細川藤孝、筒井順慶、蒲生氏郷、

思うと発言する。

勝家膝立てなをしやあ筑前守正嫡正統のおはしますとは何をさして申され候ぞ三七殿とともに山崎へ御出馬候ひしを以つていはるゝにや修理進は心得ず候と怒り聲に申しければ筑前守おし静めて申す様柴田殿の仰せにて腹藏なく申せと候により秀吉が腹におもふ處をもせしにて候三七殿は某と共に御出馬候て御合戦も遊ばし候三七殿を主君と仰ぎ奉るべくは何とて今日御評定の御座へ出仕候べきやと申し誠に道理なれば柴田も返す詞なく然ば正嫡正統と筑前守のいはるゝは誰殿にましますぞやと申すにより秀吉然れば候故殿の御嫡子は中将殿にまします中将殿の御嫡子は三法師君におはします是れこそ正嫡正統と申すべけれ（二五九頁）

このように勝家は秀吉に喧嘩をしかけ、怒って秀吉を批難した。しかし秀吉は冷静に勝家が墓穴を掘ったところを指摘し、血筋を考えれば三法師が織田家の跡継ぎではないかと指摘している。その後も、三法師が幼稚すぎると勝家が言えば秀吉は信孝を後見人とすればいいとあっさり返答する。

事を起こして喧嘩を仕出だしその上にて玄蕃に事をなせさせんと計りしとのすべて徒事となりしかば二人とも内心に末始終いかゞあらんと思へども秀吉の詞正しく理りすこしもすきまなきが故にい出ださゞりしなり（二六〇頁）

秀吉の言うことが理にかなっていて勝家は喧嘩を売って争おうとしても反論ができなかった。そのため佐久間も殺すことができず、終盤で三法師を跡継ぎにすることで勝家が老衰していることをいいことに秀吉三法師を補助して天下を奪うつもりではないかと喧嘩を仕掛けるが、「柴田殿御年高しと申せどもいまた御壮健にて勿、御老衰と申すべからず筑前事は御存じの通り柴田殿の御影を以て御家臣の列にも加はり候ものなり何とて柴田殿をさし置き左様にさし出で申すべきや」（二六一頁）と怒ることなく言ったため、佐久間もうまく丸め込まれてしまった。結果、織田家家督は三法師に、後見人は勝家に決定した。

明智の領地配分については「秀吉理りを述べて諸将を服せしむる事并 勝家長濱所望の事」に記載されており、滝川一益が清洲に到着してから会議が行われていた。評議後、また勝家は秀吉を貶めようと権威を振り、秀吉を怒らせようと腰を揉めというが秀吉も拒まず揉みほぐす様子が描かれておりこれも失敗に終わる。勝家は秀吉が山崎での功績により威厳を振るい上から物を言うと踏んでいたがその逆で、秀吉は下手下手にと話を進め正論を述べてくるので勝家が手も足も出なくなってしまい秀吉の言うがままの結果になってしまった。

『真書太閤記』は、『絵本太閤記』に似ているところが多かったが過去の伝記の誤りを指摘し史実に沿って新たに描かれていたところもあった。会議の内容は『絵本太閤記』に類似していた。

⑧大町桂月『太閤記物語』

大町桂月は高知県出身の詩人・随筆家・評論家である。『太閤記物語』は大正七年（一九一二）年に記された。『太閤記物語』では「勝家と秀吉」の章に記載がある。引用は大町桂月『太閤記物語』（新潮社、一九一八年）を参照する。

会議は清洲城で行われていて、理由として「信孝が嫡子三法師、信忠が簾中と共に難を免れて清洲の城にあり」とあることから、清洲に三法師がいたことから秀吉たちが集まったことが分かる。

勝家は『真書太閤記』、『絵本太閤記』と同じように佐久間玄蕃に会議の中で勝家と秀吉が言い争ったら秀吉を殺すように命じている。筆者の大町桂月が『太閤記物語』のまえがきに「主として『真書太閤記』に據るも、時に、『絵本太閤記』の内容をも攝り来たりて」と記述しているように、『真書太閤記』と『絵本太閤記』を参考に描かれているため類似している。家督の評議にて、切り出し方は『真書太閤記』と同じではあったが、秀吉の心中の考えが描かれているところと後見人について違いがあった。

る。慶長二〇年（一六一五）の大坂の陣で豊臣家が滅亡すると、家康の命により豊国社は破却され、神格を否定され、神官も追放される等と徹底的に弾圧された。それは明治に入るまで弾圧されたままであった[18]。このように徳川方は豊臣の影響を後世に残さんとしている。秀吉を称えるような読本は排除しなければ分が悪かったのか、文化元年（一八〇四）に絶版を命じられた[19]。それほど影響があったのだろう。

⑦栗原柳庵『真書太閤記』

『真書太閤記』は江戸中期に実録体小説『太閤真顕記』やこれまでの『太閤記』を参考に、秀吉の通俗的な伝記をまとめた実録風読物である。清洲会議の詳細は八編七之巻、「諸将清洲の城に会合の事 并 柴田佐久間内談の事」「秀吉理りを述べて諸将を服せしむる事 并 勝家長濱所望の事」の二つの章に記されている。ここで取り扱うのは栗原柳庵『真書太閤記』三之巻（博文館、一八九八年）である。

本能寺の変後、信雄の居城であった清洲にも明智軍が押し寄せてくるかもしれないと出陣の準備をしている様子から始まる。

御臺所をはじめ幼稚の君達いづれも日野の蒲生右兵衛太夫が許に忍ばせ給ひしなんと取りゞに沙汰したりければ爰へも必定寄せ来るべし然ば何として防ぐべきやと心丶に其用意をぞなしたりける（二五六頁）

「幼稚の君達」というのは、三法師のことでる。三法師は蒲生と共に近江日野（現在の滋賀県蒲生郡日野）に身を寄せていたとされている。

流布本に前田徳善院法印三法師君を供奉して清洲へ落ち来たりし處へ安土より蒲生右兵衛太夫中将殿の北の御方をはじめ幼稚の方々を御供し奉りし由を記すといへども誤りなり三法師君も日野へ御入りありしと明証あり御臺所ならびに中将どの丶北の御方は蒲生が元より預り奉りしところなり（二五六頁）

このように、『豊鑑』や『絵本太閤記』で記されていたような前田玄以が三法師を清洲に移動させ清洲に三法師が居たという話は間違いであると指摘していた。史実でも三法師が日野に居たことは指摘されているので、そこは史実に忠実である。

猿面がさぞかし人をなげに擧動申すべきを黙丶と見居候べき併しなから道理の外に勝つべき筋なく候但し今は故殿の御仇きを打ち果たし候へば御遺跡の評定こそ尤とも大切に候なれ然るを今日まで筑前より此方へ何とも申し入れず候と頗る越度たるべく存じ候因りて御遺跡の評定の為を仰せられ候て諸将をめさるべく候左候て筑前も必定参向仕まつるべく候其節の次第により筑前に喧嘩しかけて是を殺すべしと申しければ信雄を始め何れもこの義尤ともしかるべしとて諸将を清洲へ呼び集めらる（二五八頁）

『絵本太閤記』と同様、勝家は秀吉が天下人に躍り出ようとしているのが気に食わず、織田家の跡継ぎの評議の席で殺そうとしている。清洲に向かっていた勝家は評議の席を清洲城に設けた。勝家が諸将を清洲に集めたということが右の文章からわかる。清洲に集合した武将達は、羽柴秀吉・池田恒興・丹羽長秀・蜂谷出羽守・高山右近・筒井順慶・中川瀬兵衛・佐久間玄蕃・前田又左衛門・佐々内蔵助・森勝蔵・毛利河内守が挙げられている。信孝と信雄の記載はなかったため、『真書太閤記』での清洲会議には参加は無かった様である。参加者の中にいる佐久間玄蕃というのは、勝家の妹の子で甥である。勝家はこっそりその佐久間に評議の席で勝家が秀吉に喧嘩を売った時に、怒らせてから殺すようにと命じた。そして会議が始まる。

会議の内容は、台詞や心情が記され詳しく描かれていた。「座上に柴田修理進勝家故殿（信長）の妹の夫といひ當家の老臣なり 涙ながらに発言しける様」（二五九頁）とあり、織田家大老の中で一番偉い勝家が会議の主導者であった。他の武将たちが発言しにくい中、秀吉が「御遺跡の御事は既に正嫡正統のましますものを今改めて御評定との義不審に候」（二五九頁）と血筋のもと決まっているのを話し合うことが不審に

が心腹元来我よく是を知れり、表に忠信仁義を飾り、裡に大望を企て天下を掌握せんとする謀略、光秀に増る事十倍なり（中略）今故なくして彼を殺しなば、山崎の功を偏執して、罪なき秀吉を亡したりと諸士の思はんも口惜し（中略）席上にて秀吉を殺さんとこそ覚悟を究めて候へ、然る上は先君御家督評議の席に於て秀吉を恥ずかしめん、渠が怒るを待って汝忽ちに掴み殺し、我心を安くすべし（三八三頁）

勝家は織田家に忠義を持ったふりをし天下を取ろうとしている秀吉は光秀より質が悪いと思い殺そうとしている。しかし、ただ秀吉を殺すと周りに山崎での功を秀吉に取られただけで殺したのではと思われ兼ねないので、清洲での評議の際に秀吉を恥ずかしめて怒らせそこを喰って掛かればそう思われないだろうと企て、その役を佐久間に任せている。佐久間はそれを聞き入れ勝家に協力する。

その翌日、清洲で会議が行われる。勝家が主体となり会議が進んでゆく。

先某が所存は、神戸信孝殿を御世継に定むべし（中略）先君の公達信孝卿主将と成り給ふを以て、織田家恩顧の大小名、命を捨てゝ戦い、光秀を亡したるは、全く其功、信孝卿一人にあり、然るに筑州総大将の職を奪ひ、主人の公達をさし置き自ら采を取つて自分の功に備へ、心底甚だ不審し、此事は御世継定まりし上、諸士一統の議論も有るべし、御家督に於ては信孝卿たるべしと云ふ（三八三頁）

このように秀吉を怒らせるようなことをわざわざ言いながら跡継ぎは信孝だと勝家は主張している。そこに秀吉が反論をする。

大老判断理なきにあらずと雖も、天下の御遺跡は私の事にあらず、公道も以て論ずべき事なり（中略）今信長公の嫡々信忠卿の長男三法師君、幼稚と雖も爰にまします間、御跡目の事に付ては論ずるに及ばざる所なり、其嫡孫を捨てゝ他家相続の信孝卿を御跡目に立てんこと、理に的らざるにて候はんか（三八四頁）

勝家の発言に対し、スマートに反論している。そこに佐久間が進み出て、大老の中でも新参者が勝家に反論していること、三法師を跡継ぎにし自身で天下を簒奪するつもりではないかと秀吉に物申す。秀吉は騒ぐ様子もなく、そう思われるのは迷惑だ、跡継ぎが三法師に決まったら大老の古株である勝家が主体となりその他大老で支えていけばいいのではと言う。山崎の合戦に関しても他の将達が自分を主将に勧め、仇を取る弔い合戦であり速やかに敵を討ち信長の憤りを発散させることが目的であり、天下を取るなんてことは考えてもいないと言った。それに対し佐久間は主人である勝家への返答と同じである、失言許せぬと言い刀を抜こうとするが、筒井順慶を始めとする者たちに止められる。

幼君三法師殿を御跡目と定め、信雄、信孝両卿を以て後見と成し、柴田匠作、池田勝入、惟任長秀、羽柴秀吉の四人、大老卿を司り、天下の政務大小事によらず相談し、宜きに付て執行ひ給はゞ、将に天下平定し、織田の家金石よりも固かるべし（三八四頁）

織田家の跡継ぎは三法師、信雄と信孝は後見とし政治については大老の四人で取り決めることが決まり決着が付く。この評議は一日で終わったと記されていた。

明智の領地配分については「織田家功臣闕国配分」の記事に記されている。信長の死より一か月後の七月二日に清洲に再び集まり、追悼の後に勝家が池田、秀吉、長秀を集め酒を酌み交わし領地配分の評議を行った。このように、清洲会議は二回に分かれ行われてたように描かれている。

ここまで紹介してきた各書では、会議中に秀吉に対して抗う様子が描かれているのは勝家のみであったが、本書では佐久間に協力してもらいしかもわざと怒らせようと抗っている。秀吉の賢さや巧妙さを引き立たせるため勝家の悪役性を高めたのではないかと推測する。

この伝記は読本であると冒頭でいったように、大衆向けに描かれてい

一番さっぱりと記されている。林羅山は、家康に仕えていたこともあり特に脚色する必要がなかったので簡潔に記したのだろう。

⑥武内確齋、岡田玉山『絵本太閤記』

『絵本太閤記』は寛政九年から享和二年（一七九七～一八〇二）に作者・武内確斎、絵・岡田玉山の二名によって作られた読本である。読本は現代でいう小説の一種で、挿絵も描かれていることから今までの伝記より大変読みやすい作品である。

『絵本太閤記』の清洲会議は四編巻八にある「柴田勝家北国乱入」の記事に清洲に織田家の大名小名が集まった理由が記されている。ここで扱うのは早稲田大学編輯部 編『通俗日本全史 第八巻 太閤記上（法橋玉山）』（早稲田大学出版部、一九一三年）である。

天正十年六月十五日羽柴筑前守秀吉本能寺に到つて先君御落命の跡を尋ね御遺骨とおぼしき物を悉く拾ひ収め直に尾州清洲へ下向成し給ひ三法師殿に拝謁し光秀を誅伐せし旨委細言上に及び暫く滞留してぞおハしける抑此三法師殿と申は故中将信忠卿の御長子にして濃州岐阜に御座けるが去る六月二日前田玄以斎法印信忠卿の遺命を承りて岐阜の城に帰り御簾中并に三法師殿を御供成し奉り尾州清洲に移し参らせ堅固に守護し奉る（三六七頁）

三法師はもともと岐阜城にいたが、信忠の遺言を受けた前田玄以が六月二日に女性たちと共に清洲に移動させ明智軍から守護していた。そのため秀吉は光秀を討ったことを報告するために清洲に赴き滞在していることが記されている。

清洲会議の内容は『絵本太閤記』四編九巻の「織田家舊臣等評定御遺跡」に記載してある。清洲城が元は信長の居城であり信長が移った時に息子信忠に清洲城を譲り、信長が安土城に移った時も信忠に岐阜城を譲り、清洲城は信長の弟信包が守護していたという。こちらの記事にも六月二日に信忠の命により前田玄以が京都から岐阜に逃れ、岐阜城にいた三法師や女性たちを守護するため清洲城に移ったことが記されている。理由として岐阜城は信忠の居城であったため明智軍から襲われる恐れがあったためである。そこへ秀吉が山崎の合戦で光秀を討ち滅ぼし、信長の跡継ぎを決めるために三法師のいる清洲へ向かう。

北畠中将信雄卿も、右大臣の御臺所、蒲生右兵衛大夫秀賢と倶（とも）に来り給ひ、父兄の御跡目、天下の武将に備るべきは我ならんと思けるに、又三男神戸侍従信孝卿は、山崎表にて弔合戦を營み、右大臣御父子の追福に備たれば、信長公の遺跡相続せんは我なるべしと、是も急いで清洲に参じ給ふ（三八一～三八二頁）

信雄、信孝はお互いライバル視をしている。右の抜粋の通り信長の跡継ぎは自分であるとお互いが思っており、清洲城に向かう様子が描かれている。それに続き、『絵本太閤記』では柴田匠作勝家、池田勝入齋信輝、是洞五郎左衛門長秀とその他外様の武将の筒井順慶、細川刑部大輔、中河瀬兵衛、高山右近、鹽川伯耆守等や信長家臣の前田、佐々、金森、不破、堀などの面々が清洲に赴いたという。信雄と信孝どちらが後を継ぐべきか話し合うがその両人の仲が悪いことが負い目となり決着が付かなかった。信雄は次男という立場上継ぎ目に相応しいのは自分だと思い、信孝は山崎の合戦で実績を残しているため自分が跡継ぎだと思い込んでいる。

「其中にも銘々所存あつて、柴田、滝川等、信孝卿を立てゝ武將とせんと計り、蒲生、池田等は信雄卿を遺跡に即んといふ」（三八二頁）という文章からみると、信雄派と信孝派に分かれていて、誰も三法師を家督と考えていなかったことが分かる。『天正記』や『川角太閤記』でもあったように、柴田勝家は信孝側についている。また、他の伝記には無かった信雄を推している信雄派の武将の存在も記されていた。

勝家は秀吉が今後織田家を滅ぼす可能性があると思い、佐久間玄蕃を密かに清洲に招いた。その理由は下記のとおりである。

織田家の幕下諸士数多也と雖も、我に詞を返す者は独り羽柴筑前守のみ、山崎の功を以て威勢を諸士の上に振ひ、其行状尊大也、羽柴

なるまでは大老達が守護していくということが記されている。ほとんど史実に忠実である。

私たちが俗にいう『太閤記』は『甫庵太閤記』である[16]という。確かに最後に記されている「秀吉に何となく自由にせられし」と書いてあるように知行宛行に関しては秀吉が天下を見据えて欲しい領地を自分のものにしている様子が想像できる。しかし、清洲会議の内容の記述に関しては現代でイメージされている秀吉を想像できる記され方ではなかった。

甫庵の記述の仕方には伝説世界を交えて記事を記しているという特徴がある。安倍晴明や浦島太郎等の伝説世界を織り交ぜて『年代記略』を記していた甫庵は伝説世界と混然一体となった「歴史」を生み出し肯定している[17]と柳原昌紀氏は指摘している。つまり甫庵の歴史認識は伝説世界をも巻き込みそれを書物に残し肯定しているというのである。しかし、『甫庵太閤記』の清洲会議の記述に関しては、特に秀吉を鼓舞している様子は見受けられない。少なくとも清洲会議については特に伝説的要素は織り交ぜずに比較的史実に忠実に記したのだと推測される。

④竹中重門『豊鑑』第一巻

『豊鑑』は、かつて秀吉に仕えていた軍師竹中半兵衛の息子の竹中重門によって寛永八年（一六三一）までに記された。竹中は父の死後、七歳の時から秀吉に仕えており小瀬甫庵の『太閤記』や大村由己の『天正記』を参考にしながら史実に忠実な記述をしているので貴重な記録といえる。ここの引用文章は竹中重角『豊鑑』（『群書類従 新校 第十六巻』、内外書籍、一九二八年）からである。

長濱に二日逗留有て尾張國に趣給へり。彼國は信長生まれの國なれば　清洲の城を堅し、長谷川が父に守らせ給へり。おさなき子達も爰に集り居給へば也。丹羽五郎左衛門、池田勝入なども同尾張國に至りぬ。柴田修理勝家は佐々陸奥守越中の國にありしをすくはんとて彼國に打越、越後の境小津といふ城に國の兵たてこもり、越後國より勢を加へてありしをかこみて戰いしに、城中苦して和を請けぬれば、命を助城をうけ取、猶越後までも趣くべしやと云程に、信長生害し給ふと告げればいそぎ越前に打帰、頓而京へと趣しに、秀吉明智を討て尾張に至ぬと聞て、同尾張國に趣きぬ。清洲に至各對面しけり。此所にて國の様をも定給ふべしとて、城の介信忠の息三法師の主を信長の跡とし、柴田丹羽池田秀吉四人として萬おきてを定むべし。尾張國をば三介信雄、美濃國を三七信孝、かく定て各國に帰らんとす。（三七六～三七七頁）

本能寺の変で信長が死んだという情報が流れてから清洲に赴くまでの勝家の様子は細かく記されている。こちらも秀吉と勝家が会議で対決する様子は記されていない。大変簡潔にまとめ上げている。しかし、清洲での会議の後勝家が秀吉に対して良く思ってない記述があった。「柴田勝家道に兵をかくして、秀吉を討つべきとひそかにつげければ」というように、勝家は自分よりも優勢である秀吉が気に食わなかったのだろうか。この文章からは秀吉と勝家が対立関係にあったことが分かる。しかし、会議の中で対立しあっていた訳ではなかった。会議で秀吉への対抗心や天下を取られてしまうという焦りがあった様子が描かれていた。

史実に基づいているので『甫庵太閤記』とは描かれ方が違うが淡々と流れが記されているところは似ている。

⑤林羅山『豊臣秀吉譜』

林羅山は江戸時代初期の儒学者であり、その才を認められ徳川家康に仕えていた。幕府の命令により編集した『将軍家譜』の一編が『豊臣秀吉譜』である。引用は林羅山『豊臣秀吉譜』（国文学研究資料館館蔵和古書目録データベース所蔵）からである。

清洲会議の記載は秀吉が明智を討ち、長浜から清洲に赴いたことから始まる。「勝家モ亦清洲ニ到リ秀吉長秀勝入等與ニ信忠ノ息三法師ヲ評議ヲ以テ信長ノ嗣キト為」とあるように、三法師が信長の後を継ぐことが史実通り記されていたが、どのようにして決着が付いたかは描かれていなかった。また清洲に三法師がいたかも、日時もはっきりとは記されてはいなかった。そのあとには領地配分が記されているぐらいであった。

打ちに中国備中にて毛利との戦いを止め播州に戻り、三日も休まずに京都に戻り明智を討った。それに対し勝家は、信長様が切腹した報を聞いてから謀反者を二、三人は倒せたのであろうに油断して迅速な行動ができていなかったではないか。」と指摘された。勝家はそれで折れてしまい、秀吉が言う信忠の息子三法師が次の天下人であると賛同し、そろそろ秀吉の腹痛も治っただろうし戻ってきたら会議は終了だと勝家は言った。

五郎左衛門殿是を聞座敷遙に相隔申處のたいすの間へ御出候而筑前守被起候へ鶴亂もよく候哉貴所御存分之通に勝家合點候はやゝとて五郎左衛門殿と打連本の座敷へ御歸候　勝家被申出候ハ虫氣もよく候哉先程貴所被仰出筋目可然と各も同心候間目出度吉法師様を天下人に各我等をはしめとして可奉仰覺悟也目出度ゝと被申出候事（三十九頁）

丹羽が屋敷を出て、「秀吉の思惑通りに勝家が同意した」と秀吉を連れて屋敷に戻った。勝家が「腹痛は治ったようだな。秀吉が言うとおりだ、三法師様が一番血筋として家督を継ぐべきである。我々で天下人である三法師様をお守りしていこう。目出度い目出度い。」と秀吉の前で賛同した。清洲会議の内容は以上である。

『川角太閤記』には会議の内容が細かく描かれていることに加えて、会議後についても詳しく描かれていた。秀吉は会議が終わった後三法師のところへ通い懐かせ、織田家家督のお披露目の際に三法師は秀吉の膝の上に座る形でのお披露目で、その様は秀吉が大名たちに頭を下げている様子だったという場面までである。『天正記』には記述されていなかった会議の様子やお披露目の詳細や大名たちの心情まで細かく記されていた。

桑田氏によると川角太閤記は覚書と聞書が交錯し混淆したもので、特に秀吉の生涯の伝記を書こうと意識した記述ではなく、文体から見ると上司の命令で書き上げたか、誰からかの依頼で記述したものらしく、史実を描写し再現させようとした苦心のあとが窺われるという[15]。それが通説となっているが、ここまで詳細に検討したように史実とは異なる会議の流れや秀吉や勝家、丹羽等のセリフや心情の詳細な再現には、フィクションの要素も強くうかがえる。そのことについては第二節にて詳述する。

③小瀬甫庵『甫庵太閤記』

小瀬甫庵はかつて池田恒興に仕え、池田の死後は秀次に医師として仕えていた。秀次の死後には医書を出版し、関ケ原の戦い後は堀尾吉晴に仕え、慶長十六年（一六一一）に堀尾が亡き後は流浪し上京した後に、『年代記略』『信長記』を記し、寛永元年（一六二四）加賀の前田利常に招かれ、翌年『太閤記』二十二巻を完成したという。この章の引用文書は檜谷照彦『太閤記』（『新日本古典文学大系』六〇、岩波書店、一九九六年）を扱う。『甫庵太閤記』では「信長公御跡知行割之事」の記事に記載してある。

秀吉は京都にて惟任家来之者共悉く尋捜て伐捨其後本能寺におひて御切腹なされつる骸骨をよきに納め奉りてより尾州へ令下向若君へ御礼申上んと急ぎにけり　柴田修理進勝家も越中表之隙を明け吊ひ合戦のため京都さして打て上らんとせしか共はや惟任を打亡したる由三七殿羽柴筑前守より注進有しかば同十六日柳瀬より直に信忠卿御若君へ御吊ひ申上んとて是も清洲へ趣にけり　池田父子丹羽五郎左衛門尉長秀蜂屋出羽守筒井順慶其外旧臣之面々不残御若君へ継目之御礼申上んため尾州へ下着有しなり　各さし会ひ三歳之主君へ御礼申落涙之躰あさからざりし形勢甚以しゆせうなり　かくてもはてぬ事なれば若君十五歳にならせられ候まで　（中略）

或人曰く此他明地多かりしは悉く秀吉へ何となく自由にせられしやうに成行しなり

秀吉と勝家が対立はせず、もとから三法師が家督を継ぐことが決まっていた。会議の内容が詳しく書かれているわけではなく、知行宛行が詳しく記載されている。『川角太閤記』とは描かれ方が違い、淡々と経緯と結果が記されている。特に言い争ったことも無く、三法師が十五歳に

を被立候者御嫡男御尤かと存候其子細ハ城之助（信忠）様の若君御座候上者吉法（三法師）様を御取立可被成事御尤かと存候只今者御幼少たりとハ申なから御一門中勝家扨其外於同心仕者御幼少なるハくるしからずなしかは不奉仰者下萬人としてハ御座有ましく候只御筋目を被立候者以下に至まて不足御座有ましと於拙者ハか様に奉存候事　（三十七頁）

このように、会議の様子が記されている。織田家家督は誰が継ぐべきかという議題に関して最初は皆が様子を窺うように言い出さなかった。そこに勝家が信孝様ではどうだろうか、と提案している。そこで秀吉がいや、信忠様の御子息の三法師様がおられるだろうと批判している。ここで勝家と秀吉の意見が食い違い、二人が争う形となる。

勝家ハ内證氣に不合と見え申候へと色には不被出候　惣大名衆それより猶以無言の仕合なり稍暫あり丹羽五郎左衛門殿被申出様子者勝家又ハ各も被成御聞候へ筑前守申蓧も筋目凉敷相聞之申候　その子細ハ城之助様に若君無御座候へハ不及是非候　たとへ御息女もて御座候とも御一門に御縁邊可被仰合にましてや御二ツの若君様也と被申出候ハ筑前守殿追而被申ける城之助様御前方なとに御懐妊の方も御座候ハ、御産のひほを御とき被成候を御待被成男女の次第御見分可被成事こそ五常筋目も可然かと存候處ましてや若君御座候上は御取立可被成事御尤かと存候事　（三十七～三十八頁）

勝家は三法師に家督を継がせるという秀吉の提案が気に食わなかったが態度には出さなかった。しばらくしてから丹羽長秀が、信忠に娘がいたとしたら一門に嫁がせたりしなくてはならないが、二歳になる三法師がいるのだから三法師が家督を継ぐことが織田家の血筋として通っているのでは、と秀吉に賛同している。そこに秀吉も口を開き、もし信忠の側室などに妊娠している人がいるのであれば生まれるのを待って、赤子が男か女か見分けてから判断すべきだが今は無く、家督を継ぐのに最もふさわしいのは三法師であると意見を主張した。

柴田殿をはしめとし其外の大名衆筑前守申通筋目立申候とは各被存候へとも又被申出衆もなく相見え候處の爲躰秀吉御覧被付いや、此屋敷に秀吉於有之ハ惣談しにくかるへき也と思召いつもの虫氣少し指出申候と被申出候而御座敷を被立候てそれよりたいすの間へ御座候而茶坊主共に枕を取よせ被成御やすみ候てせんきまち、たるへきと被思召候處に如案評定ハとり、也其中に丹羽五郎左衛門殿被申出様子ハ勝家か様に申候とて御腹立被成間敷候筑前守申條筋目た、しきかと存候事　（三十八頁）

秀吉は意見を出した自分がいたら相談しにくいだろうと察し、「腹が痛い」と言ってその場を退出し、他の場所で茶坊主に枕を持ってこさせ横になって休んでいたという。大変余裕があるように描かれている。

秀吉がいなくなった所に、丹羽が勝家に「腹を立ててはいかん。秀吉の言うことが正しいだろう。」と言う。勝家はまだ納得がいっていない様子である。

五郎左衛門殿又被申次第右に如申候勝家御腹立被成ましく候上様於京都御切腹被成候折節筑前守ハ中國備中に大敵の輝元と指向其身に指當る大事をのかれ播州江歸城し三日とも休足不遂して即時に打てのほり我人の主のかたき無道人と討果事天命にもかなひ申筑前守かと存候　勝家と筑前守をたくらへ候得は半分にも不及身上也　上様御切腹勝家御聞付被成候とひとしく御かる羽をもつかはれ早速御登被成候ハ、惟任程なるもの二三人ハ御ふみつふし可被成ものを御油断故と存候と五郎左衛門殿被申候得ハ勝家も理につまりあやまりて候五郎左被申通も候とこそあひさつと聞之申候勝家暫工夫していや、善は急けと申たとへをおもひ被出けるか筑前守被申出通筋目立候間吉法師様を天下人に可奉仰者也筑前守虫氣も能候ハ、是へ被出よ談合相澄と儀定候事　（三十八～三十九頁）

勝家は丹羽に、「秀吉と勝家の功績を比べたら、勝家は秀吉に半分も及んでいない。信長様が京都で切腹をなさった時、秀吉は迅速に明智を

向記』、『関白任官記』、『四国御発向并北国御動座記』、『聚楽行幸記』、『小田原御陣』、『金賦之記』、『大政所御鵜煩御平癒記』、『若君御誕生記』、『西国征伐記』の総称を『天正記』という。これらは、秀吉が生きているうちに記された[12]。

清洲会議の情報は『柴田退治記』に題してある「柴田合戦記」の「秀吉と信孝の不和」に記載されている。引用する文章は桑田忠親『太閤史料集　天正記』（人物往来社、一九六五年）とする。

前秋田城介平朝臣信忠の御若君（三法師）を迎へ取りて、安土に安置し奉り、守護せしめんと欲するところに、織田三七信孝、柴田・滝川に相談して云はく。若君を秀吉に相渡すにおいては、彼一人天下を相計り、恣に権威を振ふべきこと眼前なり。むしろ、秦の趙高が怨み、唐の国忠が殃ひを招くに非ずや、と言いて、一味同心にこれを介抱す。是において、秀吉、一端、将軍御子弟の礼を重くし、且又、誓紙の恐れを思ひ、条々の懇礼を呈すと雖も、信孝、心に許容せず。剰え、内々、敵対の計策を企つるものなり。（四四―四五頁）

会議がなされた場所や日時の記述、会議がされたことも特に記述は無い。信忠の息子、三法師を安土に置き守護することが決まったことは記されている。秀吉は三法師の守護をしたいと思っていたがそこに、信孝が「秀吉に三法師を渡してしまったら秀吉が天下を取り、権威を振り始めることが目に見えている。」と勝家と滝川一益に相談する。その三人で三法師を守護することが決まった。信長の弟であった信孝の意見にしかたなく従った秀吉であったが信孝はまだ気持ちが収まらず、勝家・一益と協力し、秀吉を倒そうと企てた。ここで勝家と秀吉の敵対関係が描かれているが、勝家が秀吉に対して強い敵対心を持っているのではなく、信孝が秀吉に敵対心を抱いている。ここから賤ヶ岳の戦いへと話が流れていく。

『天正記』を記した大村由己は秀吉に御伽衆として仕えていた。御伽衆とは、主君の側近として仕え政治や軍事の相談役、また武辺話や諸国の動静を伝えたり、世間話の相手役となる者のことである。また藤田氏によると、大村由己は相国寺学僧の仁如集堯に禅や漢詩を学び、和歌・連歌にも通じていた当代一流の文人であった。その大村を御伽衆として採用したところに、秀吉のそれまでの権力者にはなかった「宣伝」を重視する姿勢が見てとれる、という[13]。

三法師を秀吉に任せてしまうと天下は秀吉に渡るのでないかと焦り秀吉を嫌う信孝、という描写は信長の次に天下統一を継ぐ人材として秀吉が一番近い存在であったと『天正記』が描こうとしていることが分かる。秀吉は庶民出身というハンディキャップを「宣伝」によって自らを特別な存在、天下人となる存在であることを他の武将達に流布させることを目的として『天正記』を記させたと推測できる。

②川角三郎右衛門『川角太閤記』巻二

かつて秀吉に仕えていた田中吉政の家臣川角三郎右衛門による『川角太閤記』は、元和七年（一六二一）から元和九年にかけて記された伝記である。川角三郎右衛門は太田牛一の『信長公記』のあとをうけ、秀吉の伝記を執筆した[14]。

ここで引用する文章は川角三郎右衛門『川角太閤記』第二（『改定史籍集覧』第十九冊目、近藤出版部、一九二一年）のものである。

本能寺の変後、明智を討ち明智の残党も討った旧織田勢力は皆岐阜の城へ集まっていた。特に清洲で会議が行われたということは記されていない。「御分國之大名小名に至るまて岐阜へ被詰候へ談合可申子細有とて被觸けれは各無殘直参候と相聞え申候筑前守殿も姫地を打立岐阜へ参着候」とあるように、『川角太閤記』では清洲城ではなく岐阜のどこかの城で会議が行われたように描かれている。城の詳細は無い。情報を曖昧にすることによりフィクション性を高めたのではないかと考える。

『川角太閤記』はこの会議までの経緯と様子を詳しく描いている。

惣大名衆も御尤に存候と計にて誰を可然と被申出衆中一人も無御座候それより互に目を被見合たると聞え申候 稍 有て勝家被申出ける ハ三七様可然からんと存候御年の比と申御覺御利はつの有様殘所 無御座候と被申出候處に筑前守殿勝家御見合ハ無殘所候乍去御筋目

日に秀吉から上方平定の報が届いたため、家康は二十二日に帰陣している。

信長の妻室や子どもたちは安土城の留守を預けられていた蒲生賢秀に連れられ近江日野に避難していた。いつ清洲に移動したのかは不明であるが『豊鑑』の清洲会議に関する記述に「おさなき子もここに集まり居給えば也」とあることから、清洲にいたことが示される。金子拓氏によると秀吉が清洲に赴いた理由を三つ挙げている。清洲に主を失った織田家の人々が集まっていたこと、美濃の混乱状態が収束した直後だったこと、家康の軍勢が一時的にせよ尾張まで進駐していたことへの警戒心があったことにより秀吉は清洲に向かった[6]とされている。

天正十年（一五八二）六月二十七日に清洲にて会議が行われた。同年六月二十七日に記された秀吉の書状に「今度　御両殿様（織田信長・信忠）不慮之義付而、城介殿（織田信忠）若子殿（三法師）、為御宿老中奉守、天下之義被仰付候」[7]と丹羽長秀、羽柴秀吉、池田恒興、柴田勝家と連署されていることから、六月二十七日に会議が行われたと考えられる。また、この書状からみると会議では三法師が跡継ぎとなることが決まり、三法師を宿老が守りたてるということが分かる。

谷口央氏は奈良興福寺の塔頭である多門院の僧英俊が記した「多門院日記」同十年七月六日条を見ると、柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽長秀、池田恒興、堀秀政の五人が会合し、信長の子である織田信雄、同信孝は出席しておらず、意外なことで嘆かわしいとする[8]と指摘していることから、信雄と信孝は会議の出席が無かったことが分かる。また、「多門院日記」七月七日条には、信雄、信孝の兄弟は幼少である三法師が成長するまでの代理となる「名代」になることを争ったとされている[9]。

このように後継者を三法師にすることは既定路線であり、御名代を信雄と信孝どちらにするかが話し合われた。しかし、両者の不仲と信雄の出来の悪さがネックとなり三法師は宿老が支えることが決まったと金子氏は述べている[10]。また、尾下成敏氏は三法師の安土入城と安土城の修復が終わるまで信孝が美濃で三法師を預かることも決定していたと述べている[11]。

明智軍の領地配分に関しては美濃を信孝、尾張を信雄、山城・丹波を秀吉、摂津を恒興、近江を勝家・長秀・堀秀政の三人で分割することが決まった。

以上が最新の研究成果に基づく清洲会議の歴史的経緯である。信長の家督を有力家臣や遺子と争うという一般的な清洲会議のイメージと大きく異なることが分かった。

第三章　伝記物からみる秀吉の虚像

この章では、前章で確認したような史実としての清洲会議とは異なるイメージがどのように作られていったのか伝記物を比較して見ていく。まず、本論で扱う秀吉の伝記の作者と作者名と成立された年代の一覧を挙げる。

①大村由己	『天正記』	秀吉と同時期
②川角三郎右衛門	『川角太閤記』	一六二一～一六二三年
③小瀬甫庵	『甫庵太閤記』	一六二五年
④竹中重門	『豊鑑』	一六三一年
⑤林羅山	『豊臣秀吉譜』	一六五八年
⑥武内確斎・岡田玉山	『絵本太閤記』	一七九七～一八〇二年
⑦栗原柳庵	『真書太閤記』	一八四九～一八六八年
⑧大町桂月	『太閤記物語』	一九一八年
⑨矢田插雲	『太閤記』	一九二六～一九三三年
⑩吉川英治	『新書太閤記』	一九四一年

これらを年代順にどう描かれているのか比較していく。

第一節　伝記物の清洲会議

①大村由己『天正記』

『天正記』は秀吉に御伽衆として仕えていた大村由己が記した秀吉の伝記である。『播磨別所記』、『惟任謀反記』、『柴田退治記』、『紀州御発

秀吉は、天文五年（一五三六）か天文六年（一五三七）の二月六日に尾張愛智郡中村に生まれたとされている。他の武将とは違い庶民の生まれであった秀吉の出自はあいまいなもので、出年は二説ある。これを示す史料として桑田忠親氏によれば、天正十八年（一五九〇）十二月吉日付で秀吉の家臣であった伊藤秀盛が記した石通白杉本坊宛の願文に「関白様　酉之御年　御年五十四歳」とあることから天文六年の生まれであると指摘している[1]。しかし、慶長二年（一五九二）三月一日に奉納された北野天満宮釣灯篭銘では「御歳丙甲、御祈祷のためなり」と記されているため天文五年の可能性もある。還暦にあたる慶長二年丙申の年に、秀吉の無病息災を祈祷したもので、この釣灯篭銘の日付は秀吉死去の前年であり、秀吉が自ら寄進した釣灯籠に刻まれたものであると考えられている[2]。以上が秀吉の出生の史実である。

ここからは伝記を見ていく。『太閤素生記』には天文五年（一五三六）正月一日尾州愛知郡中中村にて出生とある[3]と湯浅恵子氏は述べている。『真書太閤記』も同様であった。何故このような通説が記されてしまったのか。

秀吉は当時の御伽衆である大村由己（ゆうこ）に命じて自らの出生をねつ造させ世間に流布させている。藤田達生氏によれば秀吉は大村に「後胤説」と「日輪受胎説」の二つの説を流布させたと言う[4]。天正十三年（一五八五）七月、関白に任官され、翌年に「豊臣」を名乗るようになった頃、秀吉は生母なか（のちの大政所、天瑞院）が宮中に両三年仕えて身ごもり、故郷の尾張に帰って生んだものであるという「後胤説」を世間に吹聴させる。これは秀吉が天下人となった理由として皇統の流れを汲んでいることの主張であった。

その五年後の天正十八年には、生母なかが懐に太陽が入って受胎する夢を見て、日吉山王権現の申し子として秀吉を生んだとする「日輪受胎説」を流布させる。秀吉が「猿」と呼ばれていた訳として日吉山王権現の御神獣が猿であるからではないかと言われている。大村由己は秀吉の生きているうちに『天正記』という伝記を記し、後に記される『太閤記』の代表格である小瀬甫庵の『甫庵太閤記』は、大村の影響を受けている。そのため、出生の記載がある「秀吉公素生」の項目には「或時、母懐中に日輪入給ふと夢み、已にして懐妊しけるにより、童名を日吉と云しなり。」[5]とあり「日輪受胎説」が適用されていることが分かる。自分は特別な人間であったということを主張するために生んだ嘘が後の伝記に影響しているのだ。

このように秀吉の実像は、伝記物によって虚像へと変化している。秀吉の伝記は生前から成立していたとされており、死後には『太閤記』をはじめとする文学や、「太閤記物」と呼ばれる浄瑠璃や歌舞伎などの普及により後世まで語り継がれた。各時代で描かれた伝記物の記事を比較すれば秀吉像がどのように変化してきたのか研究できると考え、清洲会議を題材とし、史料による実像と伝記物による虚像を比べ、秀吉像の変遷を考察する。

第二章　清洲会議の史実

本章では歴史的史料から分かる清洲会議前後の歴史について、最新の研究成果に基づきながら確認していく。

天正十年（一五八二）六月二日未明、京都本能寺にて織田信長は丹波亀山から急襲してきた明智光秀軍の謀反にあい死去。また、信長の嫡男信忠も奮戦虚しく洛中二条御所にて自害する。この急報を耳にした豊臣秀吉（当時羽柴秀吉）は、対峙していた毛利氏と和睦し備中高松から驚異的な速さで山陽道から上がってきた。途中、四国攻めのため大阪に待機していた丹羽長秀・信長三男信孝と合流し、六月十三日山城山崎にて光秀を破る。山崎の戦いでは秀吉が指揮をとった。光秀は敗走の途中の山科の小栗栖で百姓の槍で傷を負い、家臣の介錯で自刃する。

光秀の居城丹波亀山は、秀吉に味方した中川清秀らが落とし、近江坂本城は秀吉が落とす。美濃にも光秀の残党が残っていたため信孝・秀吉が軍勢を率いて掃討。美濃制圧が二十五日のことである。

堺滞在中に本能寺の変にあった徳川家康は、命からがら三河岡崎まで辿り着く。家康はこの機会に甲斐・信濃を奪うための策動を開始し、かたわらで光秀を討つための準備を進め、十四日に尾張鳴海へ着陣。十九

伝記物に見る秀吉像の変遷 ―清洲会議を中心に―

奥田　亜里奈
（鍛治　宏介ゼミ）

目次

序章　はじめに
第一章　秀吉の実像と伝記物の関係
第二章　清洲会議の史実
第三章　伝記物から見る秀吉の虚像
　第一節　伝記物の清洲会議
　第二節　移り変わる秀吉像
終章　おわりに
参考文献

序章　はじめに

豊臣秀吉。戦国時代、庶民出身ながらも天下統一、天下人となった歴史上かつてない能力で出世を成しとげた人物である。秀吉の人間性とその出世譚は、さまざまなメディアで取り上げられ現代でもなお人気を博している。メディアで描かれている秀吉は天下人らしくない気さくさと明るい人間性を持っており、それは他の戦国武将には無い魅力がある。また庶民ながらも武将、そして天下人となる出世譚はいつの時代でも人々の胸を躍らせている。そんな秀吉に人々は魅了され、現代でも秀吉のファンは多いのであろう。実際筆者自身も小学生の頃に秀吉に魅了された一人である。そのため卒業論文は秀吉について研究しようと決めていた。

秀吉のさまざまなエピソードの中で私が最も興味を持っていたのが清洲会議である。清洲会議は日本史上かつてない会議による戦であった。信長の後継者として誰が相応しいか会議によって取り決められたと一般的には言われている。二〇一三年に公開された三谷幸喜氏の映画『清須会議』に感化され、清洲会議について調べてみると史実との違いに驚かされた。伝記で伝わる秀吉像は史実とは異なっていることが分かり、その変遷に興味を持った。それが今回の卒業論文のテーマに決めたきっかけとなった。本論文では、清洲会議を題材として、秀吉像の変遷を考察していきたい。

第一章　秀吉の実像と伝記物の関係

秀吉の一代記は秀吉が生きている頃から現在に至るまで様々な形で語られてきた。貧しい百姓の生まれから、天下人となった豊臣秀吉の出世譚は現在に至っても人気を博している。秀吉のその人気は、出世譚もさることながら今までの支配者には無い庶民性と明るい性格が語られることにより息づいてきた。しかし、その秀吉は創作された秀吉像であった。それは伝記物によって創られたとされている。伝記物に記されていることは史実ではないのかと言われてしまえば全てが史実とは言えない。史料と比較した上でやはり誤りが出てきてしまう。では、史実の秀吉はどんな人間であったのだろうか。また、どのように伝記物に記されるのか。第一章では秀吉の出生を挙げ、実像を述べた上で伝記物との関係を考察する。